

純神道

田中義能

今夕、閣下並に諸君の御會合の席に出まして、私の平素聊か研究して居りまする所を述べまして御高教を仰ぐ機會を得ましたのは私の非常に光榮とする所でございます。私は今夕純神道と云ふ題で少しく御話して見たいと考へて参りましたのでございます。御承知の通り今日神道々々と云つて居るのは世間には幾らもございます。又色々それに對する説も考へも公にされて居りますが、此れ等の學說に對して私の考へて居りまする所の純神道なるものがどう云ふ風な性質を有し、關係を有して居るかと思ふことを一通り申上げて見たいと思ふのでございます。

昔から我が國に神道として傳つて参りましたものを大ざつばに數へて見ますと十有餘になるやうてございませう。而してそれ等の神道と云ふものが皆自分の神道を以つて所謂本家本元の神道であると云ふ風に考へて居るのでありますからして、何れが是であるか、何れが非であるかと云ふことは、ちよつと判斷に苦しむ場合が多いのでございます。それで先づどう云ふ風な神道が昔からあつたかと云ふことを少しく數へて見ますと、山王一實神道と云ふのが神道として一番初めに指を屈せられるものであらうと思

ふのであります。是れはかの天台宗の方面から起つて來ました神道でありまして、之れに關する種々の著書などもあります。其の中に『山王一實神道記』と云ふのがありますが、此の本にはこんなことが書いてあります。

山王一實神道は、欽明の御宇に濫觴し、天智に滙澤し、桓式に蓊榮して、今に至る。應に知るべし。一實神道は山王の化道によりて啓發せしものにて、獨り日吉の神道に限るにあらず、八百萬の神々は、皆此の三諦一實の妙理に基きて無窮の化道を施し玉ふことをと云ふのでありまして、全く天台教理によりて、神道説を構成したものであります。従つて勿論我々の主張する純神道とは、大いにその性質を異にして居るのであります。

それから山王一實神道に次ぎまして兩部習合神道と云ふのがございます。吉田家で作りました所の『名法要集』と云ふ書物では、神道をを分つて、兩部神道、緣起神道、宗源神道と云ふ三つに分つて居りますが、その兩部神道即ち兩部習合神道は山王一實神道が天台宗に據つて居りますやうな工合に、兩部習合神道は眞言宗に據つて成立したのであります。さうしてその兩部と申すのは眞言宗の金剛界、胎藏界に基くのであります。それは後人の作て而かも空海の作として傳へられて居ります『麗氣記』と申す本の中に色々書いてありますが、其の中の一句を申しますと、兩宮兩部二ならず。三世常住の神に坐す。理智の形に應じ、天照大神、豐受大神に坐す。是れ兩部の元祖、佛法の本源なりと、斯う云ふ風に書いて

あります。伊勢の兩宮は兩部の元祖である。さうして佛法の本源であると云ふ風に説いてある。其の他兩部神道では我が國の古典を悉く眞言佛教に依つて解釋して居る。北畠親房卿と云ふやうな其の當時の偉い學者でも、眞言宗について斯う云ふ風に云つて居られる。東寺は桓武遷都のはじめ、皇城の鎮のためにこれをたてらる。弘仁の御時、弘法にたまひて、永く眞言の寺とす。諸宗の雜住を許さざる地なり。この宗を神通乘といふ。如來果上の法門にして諸法にこえたる極秘密とあもへり。就中我國は神代よりの縁起、この宗の所説に符合せり。唐朝に流布せしはしばらくのことにて、則ち日本に止りぬ。とは、親房卿の説であるが、當時一般に眞言教理によりて成れる兩部神道を信仰したものであります。それから『名法要集』に書いて居ります縁起神道、縁起神道と云ふのは所謂神社の縁起に依つて居る神道である。或は社例傳記神道、或は社家神道と申します。此の縁起神道の最も著しいのは伊勢流の神道でありまして渡會延佳、其の子延經と云ふやうな人が盛に唱へました所の神道であります。是れは伊勢の社例傳記神道でありますが、其の他例へば加茂神社ならば加茂神道と云ふ風な工合に神社の縁起に依つて神道を説きます。それが縁起神道と名づけてあります。『名法要集』ではモウ一つ宗源神道と云ふ神道を説いて居る。是れは解釋をして宗とは、一氣未分の元神を明にす。故に萬法純一の初に歸す。是れを宗と云ふ。源とは、和光同塵の神化を明にす。故に一切利生の本基を開く。是れを源と云ふ。吾が國開闢以來唯一神道是れ也と申してあります。さうして此の宗源神道と云ふものは、我が國開闢以來玄々妙々の相承て、

天照大神、天兒屋根命に授け給ひてより以來嫡々傳へて、所謂儒佛道、三教の一滴を嘗めない所の我國固有の神道である。即ち是が唯一神道である。唯一と云ふのは一人にしか傳へない。唯一一人に授ける。即ち一人に授けて一人に傳へると云うやうな風で、唯一と云ふ。斯う言つて居りますが、兎に角此の宗源神道と云ふものは實に尊い神道であると云ふ様なことを言つて居ります。斯う云う風に神道が色々ありますが、其の外に尙日蓮神道と云ふのがあります。日蓮上人が矢張り吉田家に就いて右の唯一神道を學んで、さうして一家の神道を立てたと云ふのであります。それを日蓮神道とも、法華神道とも申します。それから伯家神道です。神祇伯の家の神道と云ふのであります。神祇伯の家とは花山天皇の皇子彈正尹清仁親王の御子延信王、後一條天皇の時神祇伯に任ぜられてからその子孫が代々白川家となつて、さうして神祇伯に任ぜられて居られる。此の神祇伯の家で、神祇の祭祀、其他朝廷のあらゆる神事を司り、諸國の神社、神主、祝部等を統御す。之れを白川家の神道と云ふので、伯家神道と云ふのであります。以上の神道はまだそれ程でもありませんが、徳川時代になりましたして盛んに種々の神道が起りました。それには吉川流の神道と云ふのがあります。是れは吉川惟足が吉田家の唯一神道、即ち宗源神道と云ふのを傳へて來たのでありますけれども、而かも別に一派の神道を立てまして宋儒の學を持つて來て説明を與へたものであります。惟足は會津侯保科正之を始め、山崎闇齋と云ふやうな人から非常な尊敬を受けまして、盛にその神道を擧揚したものであります。例の社家神道と此の吉川流の神道を承けまして、

山崎闇齋は垂加神道と申すのを創めました。垂加神道とは山崎闇齋が神道家になつてからの號を垂加と申します。吉川惟足から授つたのであります。垂加と云ふ號をお前にやると言つて垂加靈社と云ふ號を授つたのであります。神道の奥義に達した者は靈社と云ふ。惟足は斯う云ふ說を立てまして、さうして保科正之にも神道の奥義に達したと云ふので土津靈社と云ふ號を授けたのであります。右の如く闇齋は吉川惟足から神道を傳はり、外宮の神官出口延佳からも伊勢流の神道を傳はりまして、之れを折衷調和して天人唯一なんと云ふ様なことを唱へまして、垂加神道と云ふものを説きました。

それから垂加神道の如きは、陰陽五行だの、又宋儒の居敬窮理など云ふやうな支那の學説を持つて來て神道と云ふのであつて我が國固有の神道ではない。彼れの如きは神典を假りて儒道を説くのであるなど、呼號して、例の復古神道と云ふものを唱ふる學者が起つたのであります。復古神道は荷田春滿、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤、斯う云ふ風に傳へて來て益々盛になつたのであります。又、復古神道では詰り文字に書きます通りに古に復へるのである。儒教、佛教が我が國にまだ傳らない以前の上古の純粹なる神道と云ふものを説かなければならぬと云ふ趣意で『萬葉集』などを一生懸命に研究して、それから遡つて『古事記』などの研究に入りましたして盛んに一派神道を説いたのであります。復古神道の起りますと同時に水戸に水戸流の神道と云ふものが又別に唱へられて居ります。水戸流の神道は光圀卿が契冲などに『萬葉集』を説かしたりして創められたのであります。當時には未だ神道と云ふ程のものにな

つて居りませぬ。唯、我が國固有の古學を研究する、國史を研究すると云ふ位の程度でありました。勿論、その事自身が已に神道の大部分にはなつて居りますが、また十分に神道とは申されません。それが後になりまして復古神道の盛んに唱へられました影響を受けまして、藤田幽谷其子の東湖、會澤正志齋と云ふやうな人が出て盛んに復古神道を攻撃して、さうして自分は神儒一致の説を立てまして、儒教と神道とは決して相悖らないものであると云ふ風な見地に立ちまして、水戸流の神道を盛んに説いたのであります。次には徳川時代の極、末になりまして例の黒住宗忠と云ふやうな人が出て黒住教を説きました。それから井上正鏡と云ふ人が出て禊教を説き、其の他色々の宗教的の神道が起りまして、今日の所謂神道十三派と云ふ工合になつて居るのであります。

斯様に昔からの神道を數へますと實に澤山あります。其の中或る神道は佛教に據つて居ります。例へば山王神道、兩部神道、宗源神道の如きは、それでありませぬ。又吉川流の神道、垂加神道、それから伊勢の社家神道、水戸流の神道、此れ等は皆儒教に據つて其の説を立て、居ります。又復古神道は主として道教に據つて其の説を立て、居ると申さねばなりませぬ。

さう云ふ風に色々の神道がありますが、併し私が此處で述べやうと思ひますのは、さう云ふ神道と少しく趣を異にしまして、我が國固有の神道と云ふものに就いて述べて見たいと思ふのであります。然らば其の神道はどう云ふのかと申しますと、即ち惟神の道であるのであります。惟神と云ふ語はどう云ふ

意味を有つて居るかと申しますと、即ち此の語は日本書記に孝徳天皇大化三年四月の詔の中にあります。即ち詔曰シテク 惟カミナガラフモ 神ニ 惟ヒテ 神者ヲ 隨ニ 神道ニ 我子應ミコソノラスシト 治故コトヨサシキ 寄と云ふのであります。勿論多くの神道家は、盛に此の語を提唱するのでありますが、我々はその内容が聊か異つて居るのであります。一體惟神と申す義は、茲に注のあります通り、神の道に隨ひ、又自から神の道あるを云ふのであります。之ればかりては、語がちよつと分りにくいのであります。之れを本居宣長の解釋に依りますと、神の道に隨ふと云ふのは、天下を治め給ふ御仕業は神代よりずつと傳はつて來て居つて、天皇御自身の考へと云ふものを一切御雜へにならない。唯々神代から傳つて來る其の道の儘に政治をなすつて御出でになる。それでちやんと天下は治つて行く。さう云ふ風になさるれば神の道は自から其處に十分具はつて來て、さうして何も他に求むる所はない、即ち神の道が自然に其處に存在して居るのである。斯う云ふ風に本居宣長は解釋して居りますが、本居と云ふ人は神道を政治の道と云ふ風に解釋して居るのであります。天皇陛下が政治を執つて御出でになるのは、即ち是れが惟神の道である。下の者は天皇陛下の仕向けて下さる通りに服従して、其のまに／＼行つて行けば宜いのである。其處が即ち我が國の神道である。斯う云ふ風に解釋して居るのであります。それでこゝでもさう云ふ風の道で、純粹に政治の道のやうに解釋して居るのであります。併し私の考へて見ますと神道と云ふものは政治の道であるとか、或は一の宗教であるとか、或は世間の人の能く言ひますやうに一の道德であるとか云ふ風に極めて範圍を限つた所のものでない。

人生百般の行動、即ち吾々の手を擧げるにも足を出すにも總べて一擧手一投足、悉く此の神道に當倣つて行くべきものである。苟も我が國民は何人も神道を離れて行動することは出来ない、斯う云ふ風に考へるのであります。従つて政治の道のみではないのであります。詰り昔の神々が色々行動せられました其の傳説と云ふものがある。其の傳説と云ふもの、精神を取つて吾々が行つて行けば、即ち此に神道と云ふものが自から行はれるのである。之れが即ち惟神の道である。斯う云ふ風に見るので、だから神道の根柢は傳説に存して居つて、さうして其の傳説の精神を受けて吾々が日々行動して行くことが即ち神道であると云ふのであります。

一體傳説と云ふものは、或は神話とも申して何れの國でもあるのであります。そして優れたものもありますし、劣つたものもありますし、又幼稚なものもありますし、發達したのものもありますし、様々の傳説があります。けれども希臘ならば希臘と云ふ國の傳説は、其の時代から希臘民族が始終變遷して居る。同一民族が希臘に住んで居ない。又國家が色々變つて居る。それで古代の傳説と云ふものが假令傳つて居つても、其の傳説は希臘の人民自身には、恰も外國の傳説かの如くに響くのであります。何等其の傳説と云ふものが生命を有つて居ない。權威を持つて居ない。所が我が國は昔から同一の民族がずっと繼續して來て居ります。さうして國家は同一の國民が繼續して來て居るのでありますから、其の傳説と云ふものも今日までちゃんと生命を有つて居る。さうして外國のやうに死んだものになつて居ない。それ

が生きて居つて、而してそれが非常に權威を有つて居るのであります。決して博物館に在る埃及の木乃伊のやうに一つの骸骨でなしに生き／＼として居るのである。生きて居るからず／＼發達して來る。又成長して行きつゝある。か様に我が傳説は我が民族と共に發達し、成長して行くべき性質を有つて居るのであります。本居、平田の流では此の傳説と云ふものを神代に止めて置きまして、殊更にその發達を無視し、他國の神話と同じ様に取扱はんとしたのであります。その結果古と云ふことが重大な意味を有し、復古と云ふことが、大事なものとなり、古學と云ふことが生命となつて參りまして、神と云ふものも神代に限つて、彼の神道の根柢を神代の傳説に限つて仕舞つたのであります。であるからどうしても保守的に傾く性質を有つて居る。さうして非常に範圍が狭いと云ふ風になつて居ります。けれども吾々の見る所では只今申しました通り其の傳説が永續的になつて發展して來るのであります。従つて神と云ふものも本居流、平田流では神代に限られて居るけれども、我々は過去は勿論、今日より又ずつと未來に及ぶまで始終出られるのである。近くは明治神宮に御祭り申す所の明治天皇を初め、乃木將軍の如き皆神である。神代の神と同様な性質を有つて居られる所の神、従つて其の行はれた所の行動と云ふものは等しく吾々の云爲行動の標準となるものである。斯う云ふ風に解釋して我が國の傳説は十分に意味をなすのであります。或はそれを歴史と言つても宜いのであります。それで古代の傳説は古代に於ける文化の總和であります。所謂シヅィリゼーションの各種の方面を悉く其の傳説の中に包含して居るので

あります。従つて其の當時に於きましての傳説と云ふものは、直に其の當時の或は宗教となり、或は學術となり、或は政治の道ともなり、或は道德ともなる。其の傳説を造られる所の人々と云ふものは其の當時の大政治家である、大教育家である、大道德家であるのであります。斯う云ふ風に解釋するのであります。

所が其の傳説と云ふものは文學が極めて簡單で極僅なことを傳へて居りますからして、それを解釋する上に於いて色々の仕方が出来て來るのであります。御承知の通り今日では心理學などに於いて人間の精神作用には知識、感情、意志、此の三方面があると云ふことを能く言つて居りますが、先づ此の三つの方面のあるものと致しますと、人間は兎角此の三つの方面の、或る方面に偏する傾きがあるのであります。それで傳説を研究して神道を立てると致しましても、或は單に傳説を研究すると致しましても、色々偏した人に依つて研究の仕方が違つて來ます。又その敷演の仕方も違つて來るのであります。例へば知識の方に偏つた人が傳説を研究すると歴史的に——私は之れを純歴史的の研究法と名づけます——歴史的に全く見て、高天原と言へば、高天原は多訶阿麻能播羅て、多珂海上の地といふことを意味し、常陸の國多珂郡の地であるとか何とか云ふやうな解釋をするのである。又天之御中主神と云ふのは何處其處の、例へば滿洲の方の元首であつたとか何とか云ふ風に、全く傳説を歴史として解釋して行かうとするのであります。尙知識の方に偏した人は神話のやうに見て、之れを神話科學的に研究して行

く、傳説を悉く神話と致しまして、例へば天照大神は太陽崇拜の神話である。素戔鳴尊は暴風を表現したもので、素戔鳴尊が高天原に行かれる時に、山河が震動したと云ふのは、是れは暴風の有様である。其の暴風の爲に天照大神が天の岩戸に御隠れになつた。即ち太陽が暗雲の爲に隠れて天地晦冥になつたと云ふ状況を書いたものである。斯う云ふやうに何もかも皆神話で以つて解釋して行かうとするのであります。是れは智識に偏した人の要求を満足させることが出来るのであります。又情の方に偏しますると之れを宗教的に見て傳説を全く宗教の根柢にしてかゝらうと云ふので、是れから純粹な宗教を導き出さうと云ふやうな企てが出るのであります。詰り神道十三派の如きは、稍々其の傾向を有つたものと認められます。又傳説を意志の方面から研究して行かうと云ふ様になつて來ますと、例の武士道の如きものを成すのであります。武士道は中古から起つたものであるとか、外來のものとか色々の議論がありますけれども、是れが我が國の固有のものであると云ふやうな學者から見ますと矢張り之れを傳説から引出しまして、昔斯う云ふことがあつた。だからして武士道は古代から出て居るのである。斯う云ふ風に説いて來るのであります。それから徳川時代になりましたの心學と云ふものも、矢張り意志の方面の要求を満たさう、實行の規範として行かう、即ち從來道徳は、學者・政治家・宗教家・武士の如き方面に適切なるものは説きあるも、商業家に商業道徳を説けるは、甚だ乏し。是に於いて商業家の道徳を説かうと云ふやうな要求から心學と云ふものが起つて來たのであります。そして此の心學は、やはり根柢を傳

説に求めて居るのであります。さう云ふ風に精神の各方面の要求からして傳説が色々に研究されて、色々に發達されて來るのであります。其の中で知にも偏せず、情にも偏せず、意志にも偏しない研究が、私は——是れはチト我田引水かも知れませぬが神道的の研究であらうと考へて居るのであります。神道と云ふものは傳説を知、情、意の三方面を調和的に、比較的の研究すべき性質のものである、斯う見るのであります。

所が其の中で、同じ神道と申しても、色々あるものでありますから、矢張り知に偏し、情に偏し、意志に偏すると云ふ傾きがあります。知に偏した部分は先に申しました復古神道で、復古神道の如きは、同じ神道を説く上に於いても非常に知の方に偏つて居る。全く理窟で神道を説いて行かうと云ふやうな傾向があるのであります。平田は大いに神道を宗教的にして佛教や基督教などの向ふを張る積りて非常に研究したのであります。又「毎朝神拜詞記」と云ふものを拵へて折本にして、佛教の經文のやうにしてそれを讀む。さうして非常に宗教的の組織をやつた。又未來の事なども説いたけれども、それだけ苦心しても矢張り宗教的の方面は出來て居ない。本居にしても、平田にしても神道の知的方面の研究を盛んにやつたものと見ることが出來るのであります。それから情及意志の方面の要求に偏つて傳説を神道的に研究したのが、前に申しました佛教的神道、或は儒教的神道と云ふのであります。其の神道的研究の中で矢張り知にも偏せず、情にも偏せず、意志にも偏しないやうにして研究して行くのが純なる神道

てはないか、斯う考へるのであります。

御承知の通り我が國民の中には昔から釋迦如來とか、或はソクラテスとか、カントとか、ヘーゲルとかと云ふやうな人物は出て居りませぬ。又基督や孔子のやうな人物も出て居られないのであります。勿論さう云ふ人物が出ないから我國にはさう云ふ人物たる資質がないかと云ふと必ずしもさうてはない。

無論知に偏したる人間もありまして、傳説を純歴史的に見たり、神話學的に見たり、或は又さう云ふ風に見た結果、色々の神話を研究して居るものもあります。又宗教的に見るものもあります。又は道徳的に見るものもあります。けれども國民の大多數は知にも偏しない、情にも偏しない、意志にも偏しない、各方面が調和的に働いて居るのが我が國民の特性のやうに思はれるのであります。どうも西洋人などに於きましても音樂の大家と云ふやうな者、或は又哲學の大家、宗教の大家と云ふやうな者を見ますと、感情とか、知識とか云ふ方面に非常に偏つた人物を作つて、其の極端までも偏つた爲に其處に大いなる真理を發見するとか、何とかと云ふやうな、或は音樂なら音樂の曲を作り出したと云ふ風な傾向があるやうに思はれるのであります。我が國民はさう參らないで、各方面に發達せんとして居るのであります。そこが我が國民の短所で、缺點であると云へば、申されませう。その爲に今列擧したやうな人物が出ないのでありませう。併し我々は却つて之れを長所と見るのであります。我が國民の長所は一般に此の一方に偏さない點にあるのであります。従つて我が國民中の大人物は、意志が頗る鞏固であるかと思へば、

又情にも極めて厚く、そして知的方面を忽にしないのであります。こう云ふ大人物の影響は益々一般國民を調和的に發達せしむるのであります。それで知にも、情にも、意志にも偏しない所の、極めて穩健な人物の要求して居る道、即ち我が國民多數の要求して居る道が、所謂純神道であると思ふのであります。

所謂純神道に於いては神道を何う云ふ風に説くかと云ふことを簡單に申上げて見ますと、先づ神道に於きまして天御中主神、高皇產靈神、神皇產靈神の三神が出られたと云ふことを皆言ふのであります。是れは『古事記』に依りますと天地初發之時、於高天原成神名。天之御中主神。斯う云ふ風に傳へてあります。それから『書紀』などに於ても天地初判高天原所生神名曰天御中主尊とありまして、斯う云ふ風に所生と書いてアレマスと訓ましてある、或は成神と書いてある、カミヤマト平田は所生とか成神とか云ふのは物の無い所に或る物が出來たことを意味するのである。天御中主神と云ふのは不生不滅即ち生れず滅しない所の神であると考られました。『古史成文』と云ふ書物を書きました。『古事記』や『日本書紀』より別に自分一家の見地に立つた古史を書きました。それには天地未生之時於高天原有神焉カミヤマトと書いてある、天地初發之時と云ふのを天地未生之時と改め、所生神と云ふのを有神焉と書いたのであります。此神は不生不滅の神で語り永久の神である。斯う云ふ風に解釋して來たのであります。所が平田の門人鈴木重胤と申す人は、此の三神は實に其の始めがあることなく、固より高天原に神留座し、大神だちに坐々けるが、こは天地の始を云ふ所なるが故に、其の時運を以て所生とこそは傳へたりけん。如何なる遠く遼

なる太古より坐りけむ。何ひ知るべきに非^{アラ}ねども、唯々其大神等に成りし天地の始を云ふ故に此れを其神の顯れまし、時とは成せるものなり。と斯う云ふ風に解釋したのである。所生と云ふのは生れる意味もあるけれどもアレは一體にアラハレル意味である。成神と云ふのも生れると云ふ意味を包含するのであると云ふやうな具合に、少し附會の解釋でありますけれども、鈴木重胤はこう解釋をしやうと苦心したのであります。

前に申しました通り傳説と云ふものは、極く簡単な文字で書いてあるのでありますから、何う云ふ風にも解釋は付くのであります。佛教なれば佛教は釋迦の説いたと云ふ經文の外に出づることは出來ないのであります。基督教で言へばバイブルの外に出ると是れは異教徒だとして破門されるやうなことになる。所が神道は生きた傳説でありますから其の傳説は始終發達して居る。若し『古事記』や『日本書紀』と云ふものが彼の太安萬侶の時などに斯様な文章に成りませずに今日迄あの通りに言傳へられて居つたならば、矢張今日の知識によりて組織立たれたものになつて居ると思はれます。所があの方に文章に書かれたから一通り固定して來ましたけれども、而かも尙其の後繼續されて歴史となつてズン／＼發達して來て居る。さう云ふ性質のものであるから色々の解釋と云ふものがそれに對して施され得るのである。さうして吾々は、その中に就いて最も首肯すべき所の説を以て真相とすることが出来るのであります。

さて天御中主神、高皇産靈神、神皇産靈神と云ふのは、昔から神道家の説では大體一致して居るのであります。宇宙の實在と云ふ風に觀る、吾々も天御中主神は宇宙の本体、宇宙其のものが神だと觀るのである。天と云ふのは矢張高天原と云ふやうな意味であります。此の宇宙全體を云ふので、御中と云ふのは、宇宙は元來東西南北上下左右全く無限なるものであるから何處でも指す所が即ち御中である、其の御中に常住ましく、その主たる神である。斯う云ふ風に觀るのであります。宇宙全體を體とし、宇宙全體を神とするのであるから、此の神は千古不滅のものである。もう出來た時もなく滅びる時もない、永久に不變なるものであるのです。所がその神の一切の現象となつて現はるゝのは産靈二神によるのであります。例へば吾々がそれを机と見、或は茶碗と見、コップと見ると云ふ風な色々のものが斯うしてあるのは、高皇産靈神、神皇産靈神と云ふ者の發現であると觀るのであります。高皇産靈神は從來神道家は之れを天照大神の時の高皇産靈尊と一緒に見たのであります。所謂造化三神の高皇産靈神と天照大神の時の高皇産靈尊と一緒に見たのであります。それで昔の神道家は解釋に苦しんだのであります。色々の矛盾な説をなしたのであります。それを突込まれると、いや是れは神のことであるから凡夫には分らないと云ふ風に遁げて仕舞つたのであります。けれども、私の見解では、後の高皇産靈尊と云ふのは全く人格を有して居られた神であつた。御子様なども澤山御産みになつた神である。其の御子の澤山ある所の高皇産靈尊と、造化の三神の高皇産靈神と混同して居つたから、何うしても解釋が付かな

い。造化の三神の高皇産靈神と云ふのは、是れは理想的の神である。宇宙の本體と云ふものに名付た所の神である。之れを例へて見ますと海の水であります。太平洋などの水と云ふものは必ず波動を有つて居る。風の時でも波動を有つて居る。所が其の波は水を離れない。水を離れないから是れは波であると言へば、やはり水である。水であると言へば、やはり波になつて居る。其の波の所を假りに高皇産靈神とすれば、水の所が神皇産靈神である。さうすると水も波も齊しく一物でありまして、それを一物と観た時が天御中主神である。其の天御中主神の動的方面が高皇産靈神となつて現はれる。その靜的方面が神皇産靈神となつて現はれる。斯う云ふ風に見まして、そして有らゆる現象を見ますと悉く常に波動を成して居る。今此の机なら机が斯うしてデット固體のやうであるけれども、是れが始終波を打つて居るのである。始終變化して行きつゝあるのである。吾々の眼には見えませぬけれども、是れが何百年何千年なり經ちますれば、遂に朽ちて全く他の物になつて仕舞ふ。即ち波を打ちつゝあるのである。斯う云ふ風に觀て行くのであります。森羅萬象の發現、或は四種の循環、百物の生々發展して行くのは、皆此の天御中主神の活動であつて、それが高皇産靈神の發現である。斯う解釋をして來るのであります。

其の高皇産靈神、神皇産靈神の活動の結果、所謂太陽系と云ふやうなものも生滅起没して居るのであります。吾々の棲んで居る太陽系は今や當に盛んなる状態に居るけれども、又他の太陽系になると既に衰亡の期に居るのもある。又今當に出來掛て居る所のものもある。さう云ふ様に眼を廣くして宇宙の状態

を見ると、如何なる太陽系も皆生滅起没してやつて居る。其生滅起没をやるのが、皆此二神の發現であります。さうして我が國の古典では、此の吾々の棲て居る太陽系の發達と云ふものを示さんが爲に、七代の神と云ふものが傳へてあるのであります。其のことは茲には省略して置きます。さうして此の森羅萬象の生々して行きます所のものを名付けて天地の公道と申します。明治天皇が即位の初めに南殿に於かせられて五箇條の御誓文を爲されました其の中に天地の公道と云ふ御言葉がありますが、其の天地の公道と云ふのは、詰り造化三神の御表現に對して名付けられたのであると思ふのであります。此の天地の公道と云ふものを吾々人間が自分の行ひの標準とするには、何うしても人格を有つた神に依つて現はさなければならぬ。其所で古代の伊弉諾、伊弉冊尊とか天照大神とか大國主神とか云ふ色々の神々、それから以後の色々の神々に依つて、天地の公道が行はれまして、さうして初めて吾々が日々實行する所の標準となり來つたのであります。

それらの神々の中で天照大神が特に優れて御居てになつて所謂人類の師表となられた御方であります。人道としての神道——人間の行ふ可き道としての神道と云ふものは、天照大神が其の起原を遊ばしたと申しても宜しいのであります。天照大神は古典の中に日神と傳へられて居ります。さうして『古事記』などに依りますと伊弉諾、伊弉冊尊が黃泉國から御還りになつた、さうして筑紫の阿波岐原に於いて禊祓ミソギハヒをなさつて、眼を御洗いになつて御生れになつたのが天照大神である。斯う云ふ風に傳へられてある。

又『日本書紀』には左の手を以つて白銅鏡を御持ちになつた時に化生神が大日靈尊即ち天照大神である。斯う云ふ風な傳説がございます。本居、平田等の學者は『古事記』に據りまして、天照大神は禊祓の時に御生れになつた神様であると云ふのであります。けれども是れは古典が其所は少し錯誤して居ると思はれます、一體古典と云ふものは幾つもありまして、其の中で比較的正しと見るべきものを採らなくてはならない。其の中に謬りのものもあると云ふことは昔から認められて居るのであります。本居平田などの先輩も、古典の謬りの所は、屢々指摘せられて居ります。それで『古事記』の禊祓の時に御生れになつたのが天照大神であると云ふことに就いては是れは『神道五部書』などに依りますと其時には色々の神様が御生れになつたやうに傳へてありますが、或はそんなことであつたかも知れませぬ。天照大神は何うしても『日本書紀』の正傳に據りまして伊弉諾、伊弉冊尊が共に御生みになつた御子であると云ふことを採らなければならぬと思ふのであります、それはどう云ふ譯であるかと申しますと、無論『書紀』の傳を一つ正しいと見るのであります。其の他『古語拾遺』の中にもさう云ふ風に傳へてございます。又素盞鳴尊が若し伊弉諾尊の禊祓の時に御生れになつたとしますと、母と云ふ御方がない筈になります。伊弉諾尊獨りから御生れになつたと云ふのであります。けれども素盞鳴尊の御言葉の中に「僕者欲罷妣國根之堅洲國」と云ふやうなことを仰せになつて居る。之れを以つて見ても妣と云ふ即ち伊弉冊尊の御子であると云ふことが明かである。さう云ふ風に色々調べて見ますと『日本書紀』の正傳に依つて天照大神

は伊弉諾、伊弉册尊の御子であると取るのが正しいやうであります。隨て本居平田の探つて居りまする魂祓ミソギの時の御子と云ふのは當らないやうであります。

天照大神の御出になつた時代は兎に角未開の時代でありまして、何等今日で謂ふ學問と云ふものゝある可き時代ではございませぬ。天照大神は『書紀』に傳へてあります通り光華明彩であつて非常に立派なる御方であつた。偉い徳を有つて御居てになつた御方で、其の光華ヒカが六合に照徹すると云ふ風に傳へてあります。斯う云ふ偉い御方が高天原と云ふ所に君臨爲さつたのでありますから、隨て大勢の者が之れを崇敬したと云ふことは並大抵でなかつたらうと思ふのであります。支那の孔子に對しては其の前に堯舜禹湯文武と云ふやうな所謂先王聖人と云ふ者がございませぬ。孔子は老子などにも會つたと云ふこととてございませぬ。さぞその影響を蒙つたこととてありませう。其の上に、孔子の前には既に支那の文明と云ふものが非常に發達して、其の文明の空氣は、孔子を養成するに十分であつたのであります。又釋迦の出生した時には既に印度に婆羅門教と云ふものがありました、其の婆羅門教は餘程發達して居つた。佛教は或る論者から言ひますと、婆羅門教を少しく改造したに過ぎないのであると云ふ位に、佛教以前に婆羅門教と云ふものが、大いに發達して居つたのであります。又基督教なども基督の出生す前に、猶太教と云ふものが、餘程の發達を遂げて居つた。基督教は矢張猶太教を少しく改造したものであるかのやうに思はれるのであります。所が天照大神の前には、どうもさう云ふ風な文明を認められないのであります。

文明の影響と云ふものが殆んど無いのに拘らず、我が國のやうな萬世一系の皇室を載く實に偉大なる國體、世界無比なる所の國家が淵源せられた。後の色々の事實を以てその淵源を推して觀ると、天照大神が如何に偉かつたかと云ふことを想像せざるを得ない。其の天照大神は老聃を師としたとか、或は禹湯文武周公の影響を受けられたと云ふやうなことはないのである。又婆羅門教の影響を受けられたと云ふやうなことはないのである。而かもかくまで偉大な影響を後世に及ぼされたる大神は、如何にも偉らかつたかと想像せられるのであります。而かもそのも偉らかつたことを傳ふるには、我が國の文明はあまりに十分であつたのであります。已にかくまで天照大神の御偉かつたと云ふのは、即ち天地の公道と云ふものを御躬ら體得せられたものではないかと考へらるゝのであります。さう云ふ偉い御方であつた所の天照大神が、後世に名を御遺しになり、又其の天照大神の御意志を奉じて後々の神々が色々へ行はれた其の結果と云ふものが、吾々國民の行ふ可き所の標準になり、規範になるのであります。それを名付けて純神道と言ふのであります。

それでは如何なる點が天照大神の特に後世に示されたものであるかと云ふ一二の點を申し上げますと、先づ天壤無窮の御神勅であります。

葦原千五百秋之瑞穗國。是吾子孫可王之之地也。宜爾皇孫。就而治焉。行矣。寶祚之隆當與天壤無窮矣。

是れは今上陛下の先頃の御大禮の勅語の中にもありまして、多くの人の皆知つて居る所であります。詰り此神勅と云ふものが、建國の根柢を爲すので、和氣清塵が弓削道鏡を面責して、八幡大神の神勅として、天日嗣は必ず皇儲を立てよと云ふことを申しましたのも其の思想の根本は、矢張此の天壤無窮の神勅にあるのであると思はれます。さう云ふ風に我が國家の所謂萬世一系と云ふやうなことは、天壤無窮の此の神勅が生出したのである。此の神勅は天照大神の御言葉である。三千年以上も昔にあつて、斯の如き雄大なる神勅を以つて國家の起源をなしたと云ふのは、他に例がない。支那邊りても堯は位を舜に傳へ、舜は位を禹に傳ふ。其の時の言葉と云ふのが『論語』の中にもありますが「咨爾舜。天之曆數。在爾躬。允執其中。四海困窮。天祿永終。」と云ふやうなことがあります。此の言葉を見ますと四海困窮し天祿永く終へんと云ふやうな非常に悲觀的でありますけれども、我が國に於ては天壤と窮り無い。永久無限であると云ふやうな具合に、雄大なる建國の思想と云ふものを含んで居る。是れは實に普通の者の言ひ得べき所でない、天照大神のやうな偉い御方を俟つて初めて口吻を出る所の言葉であると思ふのであります。

それから天照大神の言葉として傳つて居りますのは、天照大神が手づから寶鏡を持ち玉ひて天忍穗耳尊に御授けになつて仰しやつた御言葉に、

我兒、視此寶鏡、當猶視吾、可與同床共殿、以爲齋鏡。

イハヒコ

とあります。詰り寶鏡を以つて之れを吾れを視ると同じやうにしると仰せになつたのであります。さうして『古事記』の方では如^レ拜^ニ吾前^一伊都岐奉^トと云ふ風に傳へてあります。是れが詰り後世に所謂祖先崇拜或は神祇祭祀と云ふ根柢であります。若し我が國の國體に於いて祖先崇拜敬神思想と云ふもの全く脱つて仕舞ひましたならば、最早全然我が國民は存在することが出来ないものになると思はれます。祖先崇拜、敬神思想と云ふものが國體の根柢となつて、我が國が斯う云ふ風に何處迄も發展して行くのであります。此の祖先崇拜、敬神思想と云ふものは、即ち天照大神の此の御言葉に基いて居るものと思はれるのであります。即ち我が國の祖先を崇拜する、神祇を尊敬すると云ふ吾々の日常の行動の規範と云ふものが、其所に於いて示されて居るものと解釋せらるゝのであります。又其時に天照大神の御言葉として傳へられて居りますが、「以^ニ吾^ガ高原^ニ所^ニ御齋庭^ノ之^ニ穗^ニ亦^ニ當^ニ御於^ニ吾兒^ニ」斯う云ふことを仰せになつて鏡と共に稻の穂を賜つたと云ふことは、是れは西洋などの肉食人種には、大したこともありません。いけれども、我が國のやうに米を常食とする者に取つては、米は最も大事なものである。其の稻の穂を天照大神が天忍穗耳尊を御降しになる時に御授けになつて、さうして之れを以て神を祭る料にもせよ。又自身にも食べよ。又外の者にも食べさせよ。斯う云ふ御趣意で下さつた。先達て行はれました御大禮に於ける大嘗祭と云ふものも、皆茲に基いて居るのであります。天皇陛下が新嘗祭を爲され大嘗祭を爲すつて、さうして天神地祇に新穀を奉られると同時に、御自身も聞召す。又下々の者にも同じく之れを食

べさせられます。即ち敬神思想と同時に人民を愛する思想と云ふものが此の中にある。天照大神は又保食神の御殺されになつた時に、五穀の出來たのを御覽になつて是物者則顯見蒼生可ニ食而活之也。と仰せになりて非常に御喜びになつたと云ふことがあります。是れも蒼生即ち人民を御愛しになる御精神が現はれて居るのであります。一體我が國では民のことをオホミタカラと申します。即ち蒼生と書いてオホミタカラと訓してありますが、人民を寶と視るのであります。支那などに於きましては或は位を寶と視ることがある、名を寶と視ることもある。無論金錢などを寶と視るのは普通でありますが、さう云ふ場合に寶と視るものが世界で色々ありますけれども、我が國に於いては人民を寶と視る。而かも大御寶と視る。此の寶と視ると云ふことが非常な意味の在ること、自分の寶と云ふものは、即ち自分のものであつて、而して又貴重なるものである。今日でも生命財産と云ふて生命と一緒に云ふ。寶のない爲に生命を喪ふことは、日常のことである。そんなに寶は貴重なるものである。我が國は建國の初めからして、天照大神が此の國に皇孫を御降しになる時に、吾子孫の治すべき國であると云ふ風に斷定せられて、人民を御援けになつた。さう云ふ寶でありますから皇室に於いても人民を非常に貴重遊ばす。貴重せられると云ふのは尊ぶと云ふ意味よりか、むしろ大事にせられるのである。さう云ふ思想が矢張此の天照大神の時から傳つて來て居るのであります。其の他天照大神は稻を御作りになつたと云ふことが傳つて居る。又蠶を御養ひになつたと云ふこともあります。機を御織りになつたと云ふこともあります。さう云ふ風

に人生に必要な衣食住に關したことは殆んど天照大神の御考から始つて居る。一體古代の人民と云ふ者は質樸でありまして、機を織ることも、田を作ることも殆んど知らない。其所に優れた御方が出てさう云ふことを教へて下されば其の御方を普通であつても神として尊敬する。今日でも少し學問の有る者が無智の者に教へると、それを先生として尊敬する。さう云ふことで古代の人民はそれには非常に依頼し尊敬する心を起して來たのであります。況して天照大神のやうな偉い御方が人民を支配する御方であつたのですから、之れを大神として尊敬するのは當然であります。

天照大神に就いて最も著しい事件は素戔鳴尊が高天原に御出てになつた時に天照大神親ら大丈夫の姿を爲されて、弓矢を取つて之れを御防ぎになつたことであります。兵士を引率して出られたと云ふやうなことが書いてはありませぬけれども、無論天照大神が大將となつて澤山の兵士を連れて素戔鳴尊の侵入を御防ぎになつたものと思はれます。女神で在りながら武器を身に付けて侵入軍を御防ぎになると云ふことは、如何に天照大神が尙武の氣象に富んで御居てになつたか、武と云ふものを重んぜられたかと云ふことが分ります。神功皇后が三韓を御征伐になつたのと同じである。否其れ以上と言つて宜いてありませう。さう云ふ御考で建國の思想を構成して御居てになつたものと思はれます。一體我が國固有の思想は尙武と云ふことが非常に重いのであります。曩に申しました賀茂真淵と云ふ人などは、復古神道家の偉い人でありまして、『萬葉集』を非常に研究して、自らも萬葉流の歌を好んで作つたのであります。

詰り歌人或は歌の學者であります。文學者であります。文學者で在りながら其の人の著書には非常に雄大な尙武の思想が溢れて居ります。武を非常に鼓吹して居ります。でありますから私の考へますに、何うしても我が國の古代を研究して行くと自から武と云ふ方面に向いて來るのである。自然に思はず知らず其所に赴いて來るのである。斯う思ふのであります。御承知の武甕槌神經津主神は、香取神社鹿島神社として祭つてございますが、あの神などは矢張り、天照大神の時に、一方の將軍として、御奉公遊ばして、今日でも武の神として傳つて居りますが、さう云ふ神々が其の下に御働さなるのは先づ以つて天照大神が女神で在りながら、最も武を重んぜられたからであります。今日我が國が強を世界に唱へて居るのも偶然ではないてありませう。それでは天照大神は非常に武に偏した神かと云ふと、さうでなく、今申す通り稻を作つたり、機を織つたり、蠶を養ふと云ふやうなことも爲さる。即ち是れが天照大神が圓滿なる所謂知情意のどちらの方面にも偏して居られないことを示すのであります。基督とか或はソクラテスと云ふやうに、是れは知に偏したとか、彼れは情に偏したとか云ふやうなことはないのて、總べての方面に發達した偉大なる人格を備へて御居てになつたと云ふことが分るのであります。其の他皇孫を此の國土に御降りになります時に天兒屋命、太玉其の他の神々を御遣りになつて、さうして皇孫の玉體を保護し、又神祇に奉仕せよと云ふことを御傳へになつた。即ち一方に於いては玉體を護り今日で言へば近衛師團と云ふやうな具合に皇室を護衛すると、同時に一方に於いては神祇に奉仕する。詰り祭祀

と政治と云ふものに何等の區別を置かない。祭政一致の政を示されたと云ふことも分るのであります。

兎に角千丈の喬木となつて居ります所の樜の木などでも其の元は極く微々たる種子から出来て居るのである。河幅三里もあると云ふ揚子江のやうな大きな河でも、其の淵源に遡れば以つて觴を濫べることも出来ると云ふ風に、小さなものである。小さなものでありますけれども所謂旂檀は二葉よりして香ばしと云ふやうな譯で、我が國の淵源する其の頃は今日から見ると範圍の狭い、極めて幼稚のものであつたと云ふことは出来ませうが、併し其の時に斯う云ふ偉大なる雄圖を有つて此の國民の行ふ可き所の根柢を示されて居つたのが、今日の世界的大國民たる吾々國民の日常行ふ可き道となつたのであらうと思ふ。詰り天照大神の行はれたこと又それを繼いで神々の行はれたことが、吾々國民の日常行ふ可きことになつて居る。例へば蠟燭の火を天照大神が御燈しになつて其の天照大神の持つて御居てになる偉大なる蠟燭の火から、ズット神々が他の蠟燭に傳へて、さうして今日吾々國民が皆持つて居る蠟燭の日になつて居る。其の蠟燭の火となり、ともつて行くのは、詰り吾々が日々社會に活動して行くのである。其の活動の精神と云ふものは、天照大神の精神を承繼いて居るのであります。かう云ふ譯で吾々國民が悉く行ふ所のものが純神道である。斯う解釋するのであります。

世間では前に申しましたやうに、天皇陛下が神のまに／＼政治をなさる。其所が神道であると云ふ風に本居流に觀るのがあります。併しさう云ふ政治のみに觀るのは矢張知に偏した人の觀方ではないかと

私は思ふのであります。或は政治經濟、さう云ふ方面に觀るのは皆知に偏した人の觀方である。それから又神道を以つて宗教と觀るのがあります。前に申しました通り神道十三派の如きは、神道を宗教として立て、行かうとする。文部省に於いても宗教として取扱ふて居る。其の他篤博士の如きは神道は宗教であると言はれて居る、神道が宗教であるか何うかと云ふことは是れは大問題でありますから却々一朝一夕には述べられませぬけれども、搔摘んで申しますと、今日の人は神道が宗教であるか何うかと云ふことに就いて、第一神道と云ふものゝ考を明白にして居らない。其所へ宗教と云ふものゝ考が又明かでない。宗教と云ふものを色々に解釋するのであります。さうして自分の定めた宗教を尺度として神道は宗教であるとか宗教でないとか云ふ議論をして居る。或は鯨尺、或は曲尺、或はインチ、或はメートル各々尺度が違つて居る、何時迄經つても、宗教であるか、宗教でないかと云ふ結論が出来ないのであります。第一に宗教と云ふものを定め、次に神道とは斯う云ふものであると云ふ内容を定め、而して神道は如何なるものであるかと言へば一言にして分るのであります。けれどもさう云ふ風にしないから今日の議論は何時迄經つても盡さないものである。併し私が考へますと神道は前に申しましたやうに傳説から發展して居つて其の傳説と云ふものは當時の有らゆる方面の宗教も道德も政治も總べてを包含して居るものでありますから、それを發展して行きますと、自分が宗教的意識に富んだ者、感情的方面の人であるとか、兎角宗教に傾き易いやうな精神の傾向を有つて居つて、其の人が神道を見ると、何うしても、

それが宗教になります。かう云ふ方面に富んだ人例へば黒住宗忠のやうな人が、神道に入りますと直ぐに立派なる宗教を造り出して來るのであります。故にさう云ふ場合に神道は宗教であると云ふことも言へるけれども、假りに尺度を定めて宗教と云ふものを、今日の歴史的宗教に限り、宗教と云ふものは歴史的宗教の性質を有つて居なければ宗教と言へない。斯う云つて神道を見ましたならば、私は神道は宗教でないと思ふのであります。併し宗教と云ふものを非常に廣い意味に取つて見ますれば、吾々の言ふ純神道なるものも矢張宗教と云ふことが出来るのもあります。即ち純神道に於いては前に申した敬神祭祀と云ふものもあるのであります。敬神祭祀例へば靖國神社の大祭に方りまして、社前に參つて參拜をする時の吾々の精神状態と云ふものは、決して其の靖國神社に合祀されてある所の何某と云ふ人が生きて居つた中に、或はそれを生きて居ると假定して、之れに對して話をする時の状態、何か御世話になつた御禮を云ふ時の状態とは全然違ふ。その心的状態、そのものまでも入れて、それを皆宗教であると言つたならば純神道も即ち宗教である。斯う云ふことになるのであります。けれども歴史的宗教には色々の要素があります。その中でも、第一バイブルとか經典とか云ふものを備へなければならぬ。又教祖と云ふ者が必ずある。未來の信仰と云ふものがある。純神道にはさう云ふものがないのであります。此の點から云へば宗教でないと言へるのであります。それから神道は宗教でない、道徳であると云ふ議論も随分ありますけれども、是れは今申しましたやうな譯で、敬神の場合に、最も能く其の區別が

分るのであります。湊川神社に參拜する時の心的状態と、二重橋前の楠公銅像の前に行つた時の心的状態とを比較して見れば直ちに分るのであります。即ち純神道は、西洋の倫理道德などよりは、以外の種々の點を有して居るのであります。

さう云ふ譯で純神道と申す我が國固有の神道は、佛教耶蘇教の傳來以前に既に行はれた大道がズツト發達して、今日に傳はつた所のものであります、今日佛教も廣く行はれて居り、基督教も廣く行はれて居りますけれども、併し我が國民の大多數は矢張純神道に依つて行動して居るのであります。純神道はさう云ふ風な一つの宗教とか、道德とか云ふやうなものを以つて目すべきものでなく、之れを推擴めて申しますれば、即ち天地の公道である。世界各國有らゆる國民の行ふ可きものであるが、我が國に於いては、至聖至神なる天照大神の高大廣遠なる御徳により、之れを人道として顯現せられ吾々國民の云爲行動の規範とせられたのであります。それで情に偏せず、知に偏せず、意に偏しない所の大道である。若し情に偏し又意に偏しますと前に申しましたやうな具合に色々の大事業を始める宗教なら宗教でも偉大なることを始めるのである。又哲學なら哲學でもソクラテスとか、或はアリストテレスとか、或はカントとか、ヘーゲルと云ふやうな大哲學者と云ふ者を生み出すのであります。そして世の一方に偏した人は、それを崇敬渴仰するのであります。恰も碁を打たない人は、碁打、偉い碁打と云つても平氣ですけれど、碁のすきな人になれば、本因坊とか、七段とか云ふと殆んど神様のやうに思ふのであります。

我が國民はソクラテースとか、カントとか云ふ知的方面に偉大な人よりも、知・情・意の各方面に調和的に偉らしいのを理想とするのであります。て天照大神の如き偉大な御方を理想とし、崇敬渴仰するのであります。かくて我が國民は益々天照大神の遺教を奉じて居りまして、其の知や情や意志に偏しないのであります。偏しないから日常の行動が極めて調和的に行つて居るのであります。けれども、それは何か一旦緩急の場合になつて來ると其所に非常に強い意志となつて現はれて來る。或は非常に強い感情となつて現はれて來る。併し一旦平穩に歸すると又元の狀態に歸つて、平靜なる人物となつて行動するのであります。

さう云ふ譯で詰り我が國民は知に偏せず情に偏せず意志に偏しないで、さうして其の日常外國人と餘程異りたる行動を爲して居る。例へばネルソンと東郷大將と比較されるが、ネルソン提督などは死にます時に——佛蘭西艦隊が白旗を樹て來て、狙撃した爲に、殺されたのであります。其の最後の時に「神よ私は私の義務を盡した」斯う云ふ風に述べて死んだのであります。我が國民は日清戦争日露戦争の時て於いても色々の話があります通り、又先般の日獨戦争の時でも色々の話があります通り、愈々死ぬる時に、或は天皇陛下萬歳を唱へ、或は日本帝國の萬歳を唱へ、或は君が代を唱へ、或は此所は御國の唱歌を唱へて、從容死に就いた。斯う云ふやうなことは、詰り我が國民の純神道に依つて行動して居る所の一つの顯現である。純神道の結果祖元崇拜、敬神尊王、盡忠愛國と云ふ風なものが皆現はれて出て來

て居るのであります。大和民族の血の流れて居るものには、極めて少數の例外を除いては、平素皆かゝる信念の下に行動して居るのであります。

神道とは文字の示す通り神の道であつて、神々の行はれたる事蹟を標準として吾々が行つて行く、近くは、明治天皇或は、乃木大將と云ふやうな、さう云ふ神々の行はれたことが直に又吾々の標準となり、それが日本國民に普及し、日本國民の理想となるのであるのです。乃木大將が行はれたことは随分吾々から見ると出來ないことがある。電車に乗つても中へ這入つて腰を御掛けにならないで、車掌臺に立つて居られた。身大將で、伯爵の榮を以つて庭の草取をなされた。又最後には自刃して御果てなされた。かゝることは却々吾々普通の者に出來にくいこととあります。而かもそれを非常に偉いとして吾々が稱へて居る。乃木大將のやられたことは吾々には却々出來ないけれども、而かもそれを非常に偉いとして渴仰する精神がある。其所が即ち乃木將軍を神として崇拜し、自分はそれ程迄には行かずとも、理想としては成可くそれに近い行動をして行かふ。斯う云ふのであります。即ちかう云ふ工合に昔からの神々の行動を標準とする。楠正成公を湊川神社として祭り、徳川家康公を東照宮として祭つて居る。さう云ふ神々の行動を、即ち祖先の行動と云ふものを吾々が標準として行かふ。さうして成可くそれに近い行動をしよう。斯う云ふのが即ち神の道である。神の行ひを吾々が模範として行かなければならぬと云ふのであります。純神道と云ふのはさう云ふ意味のものであります。假令佛教徒であるとか、耶蘇教徒であ

るとか、或は其の他の或る道を奉じて居るに拘らず、有らゆる日本の國民が、日々行つて居る所のもの
てあります。それを又色々に申しますれば帝國憲法とか云ふやうな者も皆神の道の一つの表現に過ぎな
い。さう云ふ所に準據して行くのが即ち神の道である。それを多くの國民は自覺しない。自覺しない
て日々行つて居る。それを自覺して行つたならば益々其道に違はぬやうに行つて行くことが出来はしな
いか。斯う云ふ風に私は考へたのであります。是れが純神道として私の考へて居ります所でございます
す。大變長い間御清聴を煩はしまして誠に恐縮に堪へませぬ(完)

右講演後高木男爵及び加藤博士は宗教といふ文字に關し次の如く述べられたり。

高木兼寛述

唯今の御話について思ひ出した所を一寸申し上げます。私は宗教と云ふ文字の解釋から考へて見て、何
うしても是れは區別がないものと云ふ考を有つて居るのであります。本來日本に於きましては宗教とい
ふ熟字は無いと云ふことを聞いて居る。宗を教へると云ふ略字である。江戸幕府の時分に米國から通商
條約の申込をした時分に、我國の宗教を貴國に教へることを御許容になりたい、即ち宣教師を連れて來
て彼等の信ずる宗教を布演することを御許しを願ひたいと、斯う云ふ請求がありましたときに、江戸幕
府は、宜しい、斯う云ふことになつた。其時分に宗旨を教へると云ふ字を略して其翻譯が「宗教」となつ

たのであるといふ話を承つて居る。それを私に知らせた人は福地源一郎君である。さうして伊藤公と懇意でありまして、今の永田町の總理大臣の官邸の處へ私も參つていろく話の出た時分に、宗教と云ふ熟字は吾々が寄つてたかつて斯んなものをひねくり出したと云ふことを聞いて居る。いつか加藤さんも話した様であります。極く古い所では今日云ふ様な意味で宗教と云ふ字を使つて居るものは無いと云ふやうな話もありました。全く然うかと心得て居る。

そこで宗旨と云ふのは何う云ふことが。宗旨と書いて之をどちらもムネ、ムネと訓める。そこでムネと云ふことが一體日本で何う云ふ意味であらうかと云ふのです。これは結び纏めると云ふ意味ではないか。二つ重ねて見れば尙しまると云ふ意味になる。何をそれでは纏めるのかと云ふに至つては其處は附會の様でありますけれども、もとく字を拵へるときのことを考へなければならぬ。「ウ」は宇宙と訓んでもよい、或はイへと訓んでもよい、斯う云ふことに利くので、果して之を宇宙と見ると、宇宙には一定不變の則があると云ふことを標榜するから此處に「示」といふものが附くのである。斯う言へる。宇宙は小さく碎いて云へば家である、家には一定の則があるものである、斯う云ふ風に言ふことが出来る。併ながら家の内には何があるか。倫道の方から申せば則ち君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友と云ふものがある。所謂君臣の義、父子の親、或は夫婦の別、長幼の序、朋友の信と云ふものが何うしてもなければならぬ。それに加ふるに、所謂常道の方から言葉を使へば仁義禮知信である。五倫があつて五常其もの

がなければ家と云ふものは纏まらぬ、一家の圓滿なる纏りの付かぬものであると云ふから、つまり言つて見れば則ち家と云ふものは彝倫があると云ふこと、少くとも暖簾レが掛かつて居るのである。之をまくつて見れば内に家と云ふものがある。それで此示す教へるは宗教だと云ふことである。して見れば吾人が生活する道は、夫婦としては是れ、父子としては是れ君臣としては是れ又他人と交はるときには是れと云ふ道を教へると云ふことである。それが即ち宗旨と云ふことである、それを人に教へると云ふことを知らしめると云ふことが宗教であると云ふ。して見れば則ち道德と云ふものがあつて右申したことを總て行ひ得るに非ざれば一身を全うすることが出来ないと言ふやうな意味から出て居るものでありますから、神道と云はず、佛教と云はず、耶蘇教と云はず、悉く守る可き方法が凡そ定められてある。之を守れば所謂安心立命が出来る。斯う云ふことになるのであります。神道でも儒道でも同じ結果を見る。いつか此處で私は話したことがあります、即ち我が心は變り易いものである故に、一定の據所を拵へて之を辿つて初めて其行動を全うすることが出来る、其道は同じことである。即ち我國で申しますれば忠孝の道を以て動き易い變はり精神を一定の道に歩ましむる様にすることが出来る。それは何かと云へば則ちイマシメ(戒)と云ふ言葉を使つて居る。何を戒めるかと云ふと魂を戒めるのである。これは違つて居るかも知れませぬが、イマシメの「イマ」は何う云ふ意味かと云ふと、是れは魂が飛ぶ——吾々の魂が勝手な行動を執らないやうに締(シメ)て置く。そこでイマシメと云ふ語が出来る。即ち私が申しまするコロ

くする魂を縛つて抑へる。私の申しまする心は護謨玉の様なものである、護謨玉を叩けば飛上がる、即ち吾々の心が四圍の刺激を受ける、其刺激があると玉が飛ぶ。激しいこと或は氣に入らないことを言はれると激して脱線することがある。其脱線を防ぐには縛つて置かなければならぬ。それを縛るのには五倫五常を以てする。佛教に於ける十善或は耶蘇教に於ける十戒と云ふ如きもので魂を縛めて置くと云ふことになる。其縛める道を總て教うると云ふやうな解釋を有つて居るのであります。其故に佛教でも儒教でも根本的原理は安心立命を求むるに在る。其安心立命を求むる方法は變はり易いところの魂を拘束するに在る。斯う云ふやうな見地を以て宗教と云ふものを觀て居るのであります。そこで我國の教も少くも俗に謂ふ所の宗教と云ふものと變りがない。

もう一つ神の道と云ふことに就いて申上げます。抑々神とは如何なることを意味するか。私は幽顯と云ふ語を使つて居りますが、神とは幽顯である、見えず隠れずと云ふことである、有形無形の自在なる働きを示して居るのではないか。即ち神の道とは有形無形なる道を謂ふ。即ち無形になるのも一定の則がある、又顯れて來るのも一定の則がある。そこで顯れたり隠れたりする、其れが洵に旨く出來る。私は今斯うして生れて居りますが、死ねば腐つてしまふ。腐つて何處に行くか。青山の墓地に埋まつて居るが何時の間にか無いものになつて了ふ。何處に行くか分らないが、それにも無くなる法があるに違ひない。それが自然の道と云ふものである。私の解釋では、道と云ふ字は是を書いてそれに首を書く。こ

れがミてあつて、これがチである。是れが旨く箝まつて行くと云ふことが即ちミチ(道)である。それですから顯れるときの法又隠れるときの法と云ふものも一定不變の動かすことの出来ないものである。それを今一寸言ふて見ますと神の道と云ふことになる。今此燐寸を擦つて火を燃やしたら何うなるか、斯の如く燃えてしまふ。之に何か一定の法があるに違ひない。有形なもので目に見えて居りましたが燃やせば直ちに幽界に歸してしまふ。斯う云ふ風に觀ますと、極く淡泊な或は淺薄な考でありますけれども幾分か趣味があると自分では信じて居る譯であります。普通の話とは違つて居りますけれども、兎に角神の道と云ふことは幽顯の働きを指したものである。其働きは一定不變の動かす可からざるもので、之に正直に従ふと云ふことが忠孝の解釋である。まめに従ふ。忠孝と書いて之をまめと云ふ。天地の公道は所謂天佑の道で、左右の出來ぬものである。それを間違ひなく其通りにすることが忠孝と云ふことである。そこでさう云ふ様にすることを一通り纏めて道德と云ふ。此道德を何と解釋するか。之をすべつこくして、極まつて居ることを極まり通りする、斯う考へるのであります。デタラメを申上げまして甚だ相濟みませぬてございました。

加藤玄智述

私は宗教を専門に研究して居りますけれども、此日本語の宗教と云ふ言葉の起源に就いては一向分らなかつたのであります。所が先年高木男爵の慈惠院に出ましたときに、私が宗教を専門に研究して居ると

云ふことからして、今の日本人の宗教に就いて唯今の御話を承はつて、初めて今日吾々の使つて居る宗教といふ語——英語のリリヂオン、獨逸語のレリギオン、佛蘭西のルリヂオンと云ふ語に充てた日本語の宗教と云ふ語が何處から來たかと云ふとを男爵に教へて戴いて大に喜びまして、其時に非常に御禮を述べたのであります。其時に話いたしたと思つて居りますが、古い所で宗教といふ語の書物に見えましたのは、本朝高僧傳といふ書物に二三箇處ありまして、宗教といふあの熟字の通りの字を使つて居ります。私も慈惠院で男爵の御話を承る前に其字に注意して居りまして、妙な處に宗教と云ふ字が出て居るが日本人が西洋のリリヂオンの譯字を斯う云ふ處から考へ出したのではないかと思つたのであります。哲學上の語で例へば先天とか後天とか云ふやうな語はみな身などにありまして、日本人が初て西洋哲學をやる時分に、あゝいふ處から取つて譯したのであるから、宗教と云ふ字も多分そんな處から譯したのではないかと思つたのであります。所が本朝高僧傳にある宗教は吾々の謂ふ意味のではなくして宗教と云ふ熟字はありまして西洋のリリヂオンの意味ではない。佛教で宗乘餘乘と云ふ字を使ひますが、其宗乘と略々同様に使つて居るのであります。例へば眞宗なら眞宗で自分の宗旨の教を宗乘と云ふ、又其眞宗に對して例へば日蓮宗或は天台宗の教理を餘乘と云ふ。其宗乘の意味で本朝高僧傳には宗教と云ふ熟字が數箇所使つてあつたと記憶いたして居ります。其事は男爵にも話いたしましたが、兎に角先程仰せの通り、西洋のリリヂオンを宗教と云ふ譯にしたのは全くさう云ふことゝ無關係に此字の如き翻譯が出

來たと云ふことが男爵の御話で大變明瞭になりました。其後私は「宗教之學術的研究」と云ふ小著を公にしました時分にも、其中に此事は書いて置いた積りてあります。

私共は西洋の書物を餘計讀みますので西洋の言語の起源は幾らかよく分つて居りますが、英語のリリヂオンは拉丁語でレリギオと云つてンといふ字を省いてありますが、是れも語源に就いては非常に疑があるのです。一は拉丁語のレリゲーレと云ふ字から來たといふ説と、一はレリガーレと云ふ字から來たといふ説がある。これは動詞ですが、この動詞から變化したのだといふことを西洋の學者は言つて居ります。レリガーレと云ふ方は、尊敬をするとか、注意をするとか云ふやうな意味であります。それで奇態なことには「宗教」に當たる語が基督教の本になつて居る舊約書には見當たらないて、却て拉丁語に見える。羅馬人の特色は法律に在るけれども其人間の言語が今日に遺つて宗教と云ふ字の語源を成すことは餘程おかしいのでありますが、兎に角羅馬のレリゲーレ若くはレリガーレから來た。まだ外から持つて來やうとする學者もありませんけれども其れは到底成立しないのです。先づ此二つが物になりさうです。レリゲーレの方は彼の有名な羅馬のシセローが使つて居るしそれからレリガーレの方は基督教の教父ラクタンチウスと云ふ人が使つて居つて、ラクタンチウスと云ふ人の書物の中に、信仰を以て神と人間とを結付けるといふ意味に使つて居ります、これは基督教の方では都合が好いのであります。神と人間とを結付けると云ふ意味の動詞からしてリリヂオンと云ふ字が來たと云ふことならば大變都合が好

い。けれどもマクスミユレルなどの研究に依りますと、古典に在る拉丁語の古い所では、レリグエーレで、其方からリリヂオンと云ふ字が導かれたのであらうが併し其方に學者が皆賛成する譯ではない、亦反對の説を唱へる人もある。即ち西洋のリリヂオンと云ふ語の起源はいろ／＼説があつて竟に一定して居らぬと云ふ状態になつて居ります。併ながら、語の起源はさういふ風で畢竟分らぬことになるのであります。基督教及び其他の宗教を西洋語で呼ぶときに Religion と云ふことに確定してしまつて其れを日本の方に氣が着かなかつた。然るに偶々男爵の御話の間に日本語に就いての由來が分りまして非常に有難く思ひました。今晚は宗教と云ふ語のことが大分やかましくなりましたから序に御參考までに申述べたのであります。

